

世界盲ろう者連盟設立総会と第7回ヘレン・ケラー世界会議

(ニュージーランド、2001年) および第13回

盲ろうインターナショナル世界会議（カナダ、2003年）の意義

中澤 恵江

(重複障害教育研究部)

世界盲ろう者連盟が2001年10月に設立された。すなわち、世界の盲ろう者が独自のアイデンティティーとニーズを表明し、平等な社会参加の機会と権利を獲得するために世界に向けて自らの存在を宣言した。世界盲ろう者連盟は国際障害同盟に加わり、他の国際的な障害者団体と同等の立場で国連等における活動も開始した。本報告では世界盲ろう者連盟の設立総会と、その設立に先立って開催された盲ろう当事者の世界会議である第7回ヘレン・ケラー世界会議の状況について報告し、これから世界の盲ろう者運動の動向について概観する。次いで、2003年に開催された盲ろう支援者の国際会議である第13回盲ろうインターナショナル世界会議について概観する。盲ろう当事者が主体となるヘレン・ケラー世界会議と支援者が主体となる盲ろうインターナショナル世界会議が連動している状況について考察し、最後に、これら国際的な状況を反映した、日本における盲ろう者および支援者組織の動向について述べる。

I. 世界盲ろう者連盟の設立

これまで、盲ろう者による盲ろう者のための独自の国際組織ではなく、世界盲人連合の下部組織である「盲ろう者の活動についての常任委員会」として存在してきた。盲ろう当事者の世界会議はヘレン・ケラー世界会議と称され、基本的に4年に1回開催され、世界各国の盲ろう者のリーダーともいべき人々が参加している。（中澤、2002）資金面において、世界盲人連合がその多くを負担してきた。しかし、過去十数年にわたって、盲ろうとして独立した国際組織をもつ必要性が議論され、ニュージーランドで開催された第7回ヘレン・ケラー世界会議の日程に続けて、世界盲ろう者連盟の設立総会が開かれるにいたった。会議と総会は、2001年10月7日から12日にかけて開催され、筆者は日本代表団の日・英語通訳者として参加し、また、世界の盲ろう者の活動の動向と盲ろう児教育との関連について情報を収集するために参加した。

過去十数年間にわたって、盲ろう者世界連盟の設立に向けて、多くの議論が盲ろう者の間で行われた。設立への反対意見の代表的なものは、人口の少ない盲ろう者が独立した国際組織をもつことによって、経済的にも政治的にも、

かえって不利益を被るのでないかという点であった。しかし、徐々に世界の盲ろう者の間に合意が達成されるにいたったのは、「盲ろう者の豊かな人生を実現するためには、『盲ろう者』という存在の独自性の認識と主張がどうしても必要だと考えられたからである。」（福島、2002）

世界盲ろう者連盟が目的とするところは、盲ろう者が社会のあらゆる分野において平等の権利と機会を得ること、盲ろうの分野における知識と経験を交換する世界的なフォーラムたること、そして盲ろう者組織間の国際的連帯を強化し、世界の盲ろう者の生活の質を改善することにある。

連盟の具体的な働きとしては、以下のものが主要なものとして挙げられている：

- 1) 社会的インクルージョンと社会の全ての領域における参加の平等を促進すること。
- 2) 盲ろう者の教育およびリハビリテーション分野の改善を促進すること。
- 3) 盲ろう者に対する差別と戦うこと。
- 4) 独自の障害としての盲ろうに対する人々の認識を高めること。
- 5) 各国の盲ろう者の全国組織の設立を促進・支援すること。

また、他の国際障害者組織と協力・連帯して、障害者の権利を世界的に擁護するための活動を展開することも目指している。

総会における投票権は、参加国を代表する盲ろう当事者の組織が有しており、盲ろうの個人会員は総会での発言権だけをもっている。盲ろう当事者以外は、賛助会員として参加できるが、総会における発言権および投票権はない。総会の選挙で選ばれる役員は会長を含めて4名。また、世界を6つの地域（アフリカ、ヨーロッパ、アジア、北米、南米、太平洋州）に分け、それぞれの地域の代表が選挙で選ばれる。4名の役員と6名の地域代表の計10名が執行委員会を構成する。なお、アジア地域代表として、日本から参加した盲ろう者が選出された。

各国の盲ろう者組織の設立を促進する活動については、スエーデンの盲ろう者組織がこれまで南米を中心にサポートしてきたが、現在はその焦点を東アフリカ3カ国（ケニ

ア、タンザニア、ウガンダ）に移行させている。スペインの盲ろう者組織は一貫して南米への支援を推進してきている。奇しくも、この二つの国の盲ろう者が、世界盲ろう者連盟の初代会長と副会長に選出されている。

国際的な活動については、世界盲ろう者連盟は「国際障害同盟」(International Disability Alliance)に加わり、国連における障害者の権利条約実現等に向けて連帯・協力することになった。（世界盲人連合、2002）

これは同時に、国際的な舞台において、世界盲ろう者連盟が公式に認知されたことも意味している。なお、「国際障害同盟」は、国際障害者団体会長同盟から発展した同盟で、現在は次の7つの国際障害者組織からなっている：世界盲人連合、世界ろう連盟、障害者インターナショナル、インクルージョン・インターナショナル（国際育成会連盟）、精神医療利用・生還者世界ネットワーク、リハビリテーション・インターナショナルそして世界盲ろう者連盟である。

第二回世界盲ろう者連盟総会は、ヘレン・ケラー世界会議と同期してフィンランドにおいて2005年に開催される。アジア地域を代表する日本での開催は、次回の2009年あるいは次々回の2013年に強く期待されている。

II. 第7回ヘレン・ケラー世界会議

第7回ヘレン・ケラー世界会議には、28カ国から盲ろう者約100名を含む300人近い参加者を得て開催された。同時に多発テロが発生した9月11日から一ヶ月も経過していない時期であったため、アメリカとイギリスからの参加者が通常よりも少なかった。第7回ヘレン・ケラー世界会議のテーマは「盲ろうであることが意味するもの—アイデンティティ、権利、団結」であり、そのすぐ後に控えている世界盲ろう者連盟の設立へつながるテーマとなっていた。

開会式の来賓は、ニュージーランド障害者施策担当大臣、世界盲人連合会長、世界ろう連盟地域代表、インクルージョン・インターナショナル会長等という、一国の大臣および国際障害者運動のリーダーたちであった。スピーチは、世界盲ろう者連盟の設立を祝福する言葉に満ちていたが、特に世界盲人連合会長、スエーデンのキキ・ノールドストロームは、自らの団体からの盲ろう組織の独立を激励し、引き続き支援を惜しまないことを述べていた。

会議そのものに関しては、テーマに即した内容が報告されたことは当然であるが、前回の世界会議から見られた盲ろう者と非盲ろうの支援者等の接近が、随所に見られた。

1997年に開催された第6回世界会議では、全体会や分科会での発表は一つを除いて、すべてが盲ろう当事者によるものであった。その例外は、盲ろうインターナショナルの名称変更と規約の変更そしてこれから活動方針についてであった。しかし、今回の第7回世界会議では、いくつか

重要な発表が非盲ろう者によって行われ、盲ろう当事者の参加と熱心な質疑応答が行われた。コロンビアの盲ろう児者支援プログラムの指導者、オーストラリアの盲ろう支援プログラムを展開している専門家、オーストラリアの盲ろう向け電話リレー・サービスを実施している企業の聴覚障害のある職員、スエーデンの盲ろう・ろう者のための通訳会社の代表者、先天性盲ろう児の養育にかかわっている小児神経医師、盲ろう者的人工内耳について経験のある耳鼻科医師、先天性盲ろう児の親でもあるサイコロジスト等々である。

また、世界盲ろう者連盟初代会長に選出されることになったスエーデンのスティッゲ・オルソン氏に対して、盲ろう教育と福祉への卓越した貢献に対して、会議中に盲ろうインターナショナル代表が賞を手渡した。氏は10年以上にわたって、南米における盲ろう者の発見と組織づくり、そして盲ろう児教育の創設に向けて、貢献を続けてきた。氏は世界盲ろう者連盟設立の最大の功労者であるとともに、盲ろう当事者国際組織と盲ろう支援者国際組織の連携に大きな役割を果たしてきたといえる。

III. 第13回盲ろうインターナショナル世界会議

第13回盲ろうインターナショナル世界会議は、2003年8月5日から10日まで、カナダのトロントにおいて開催された。SARSの広がりのため、アジア地域からの参加国は3つのみであったが、結果として48ヶ国、557名の参加者を集めて開催された。筆者は、世界の最新の盲ろうに関する情報の収集と、アジアとのネットワークづくりのために参加了。

会議のテーマは「コミュニケーションは、盲ろう者にとって世界へつながる扉を開く鍵である」。主催者は「カナダ盲ろう風疹協会」である。

開会式における開会宣言は、壇上に一緒に立った盲ろう者、盲ろう児の保護者、盲ろう支援の専門家の三者によって行われ、盲ろうインターナショナルの新しい特徴を象徴的に表していた。

基調講演の他に、会議では130のワークショップ・セッション、32のポスター・セッション、21の展示、12のテーマ別国際ネットワーク交流、盲ろう関連施設の見学等があり、早朝から夜遅くまでぎっしりと詰まった会議となった。

前述のヘレン・ケラー世界会議と呼応して、盲ろうインターナショナルの世界会議でも盲ろう支援者の発表だけでなく、盲ろう児の保護者や盲ろう当事者の発表が増えてきた。盲ろう者の発表としては、スエーデンの盲ろう者による「青年盲ろう者全国組織」、クロアチアの盲ろう者による「盲ろう者社会におけるコミュニケーションの多様性」、イギリスの盲ろう者による「視覚障害を重複するろう者に取

り組むろう者通訳養成の向上」の発表があった。盲ろう者の立場から報告された盲ろう者の取り組み、現状、通訳養成プログラムは、盲ろう支援の専門家に重要な示唆を与えた。

ワークショップで取り上げられたテーマは、先天性盲ろう児に関しては、コミュニケーション、統合教育、余暇活動、感覚機能検査、ICTの活用、卒業後の生活等があった。盲ろうの成人に関しては、職業訓練および職業の可能性、医療等の特殊な場面での通訳の課題、精神衛生、ピア・サポート、高齢盲ろう者支援、人工内耳等があった。そのほかには、盲ろうに関する大学レベルの養成課程、盲ろうをもたらす疾患の情報、開発途上国におけるさまざまなサービスの展開等があった。

盲ろうをもたらす疾患の中で、今回の世界会議で非常に発表件数が増えたのがCHARGE症候群であった。この疾患とその教育的な課題についての研究が世界的に進みつつあり、日本では十分な研究がされていない領域についての収穫が大きかった。また、アッシャー症候群については遺伝子レベルでの研究が進み、将来的には視覚障害の発症を防ぐ研究にすすむのではないかという期待が表明された。アッシャー症候群タイプIの早期診断が可能になると同時に、早期からの家族に向けての適切な情報提供の必要性が指摘されていた。進行性のアッシャー症候群は日本では学校在籍中に特定されることがほとんどなく、生活に支障をきたすほどに視覚障害が進行してから始めて対応が始まるため、多くの問題をもたらしている。このような状況の改善のためにも、現在海外で取り組まれている研究および実践から学ぶことが多い。

テーマ別国際ネットワークは増え続けており、現在以下の13が正式に登録されており活動を展開している。1) 後天性盲ろう、2) CHARGE、3) コミュニケーション(先天性盲ろう児の)、4) 先天性盲ろう成人、5) ヨーロッパ盲ろうネットワーク、6) ヨーロッパ・アッシャー症候群ネットワーク(当事者主体)、7) アッシャー症候群研究グループ(専門家主体)、8) 発達解釈、9) 重複障害を有する視覚障害ヨーロッパ・ネットワーク、10) 北欧文化ネットワーク、11) 触覚的コミュニケーション・ワーキング・グループ、12) 職員研修、13) 盲ろうのきょうだいネットワーク。現在、盲ろう児の親世界ネットワークの形成が検討されている。

開発途上国の発表では、南米が多くの発表を行っていたが、インドが10名を越える参加者を擁し、活発なサービス展開について報告していた。

全体会における基調講演は、主催国カナダおよび世界各地における盲ろう支援の取り組みの報告が主体となつたが、それとは異質な報告が一つ行われ、注目をあつめた。先天性風疹症候群の神経生理学的研究の第一人者である、

ノルウェーのニコラス・ジュード博士による脳科学からアプローチした盲ろう児のコミュニケーションの獲得についての知見であった。

次の盲ろうインターナショナル世界会議は、2007年、オーストラリアで開催されることが決定された。

IV. 日本における盲ろう当事者および支援者組織の動向

世界盲ろう者連盟の設立と障害者権利条約の成立に向けた他の国際組織との協同、盲ろう当事者組織と盲ろう支援者組織の連携の進展、開発途上国での盲ろう者組織の立ち上げと支援サービスの展開—このような世界の変化は我が国にもさまざまな影響を及ぼしてきている。

世界盲ろう者連盟の設立を受けて、日本においても盲ろう当事者の組織づくりが開始された。1991年に設立された社会福祉法人全国盲ろう者協会は、盲ろう者支援のための組織である。日本の各都道府県の盲ろう者友の会の代表等が中心となり、全国盲ろう者団体連絡協議会設立準備委員会が組織され、盲ろう者全国組織の設立に向けて協議を重ねている。2002年10月には、世界盲ろう者連盟会長、スエーデンのスティッグ・オルソン氏を日本に招へいし講演会および交流会を開催した。(朝日新聞、2002)

また、社会福祉法人全国盲ろう者協会は2003年度から厚生労働省から助成金を受け、国際協力のための事業を開始し、先進国における盲ろう者と支援体制の実態を調査すると同時に、アジアにおける盲ろう者の実態についても調査を開始し、世界盲ろう者連盟総会およびヘレン・ケラー世界会議を日本で開催するための基礎的な準備を開始している。

盲ろう支援者が主体となる組織は我が国にはなかった。しかし、2003年7月に全国盲ろう教育研究会が発足した。(中澤、2003) この研究会は盲ろう児者の教育と福祉に貢献する研究を推進し、情報を共有するために設立された。盲ろうインターナショナルの動きと同じように、その会員は学校教員やリハビリテーション専門家にかぎらず、盲ろう者、保護者、通訳者、学生等、盲ろうの支援に関心のある人に幅広く開かれている。全国盲ろう教育研究会の設立総会には多様な職種の人々が参加した。盲ろう児の保護者、盲ろう者、盲ろう児を担当している教師、障害児療育センターの指導員、歩行訓練士、大学教員、職業リハビリテーションの研究者、言語聴覚士、通訳者、学生等々である。

日本におけるこのような変化は、国際交流がさらに深まるとともに、速度を増していくことと思われる。当事者組織も支援者組織も誕生間もない組織であるため、その展開については改めて別稿にて報告したい。

引用・参考文献

中澤恵江：歴史的な三つの盲ろう国際会議に参加してー第6回ヘレン・ケラー世界会議（コロンビア、1997年）、第12回盲ろうインターナショナル世界会議（ポルトガル、1999年）、第1回盲ろうインターナショナル・アジア会議（インド、2000年）ー、世界の特殊教育XV、国立特殊教育総合研究所、平成13年（2001）、67-72。

福島 智：第7回ヘレン・ケラー世界会議および世界盲ろう者連盟設立総会、コミュニケーション、24、平成14年（2002）、7-12。

世界盲人連合（全日本聾啞連盟訳）：第4回国際障害同盟（International Disability Alliance）会議報告、4月16～18日、ジユネーブ、<http://www.jfd.or.jp/int/ida/ida4/ida4-wbu-report.html>、平成14年（2002）

朝日新聞：世界とつなぐ、世界をつなぐ盲ろう者たちー100万人超す仲間へ、国際組織スタート、平成14年（2002）10月30日。

中澤恵江：全国盲ろう教育研究会の設立、ノーマライゼーション、10月号、平成13年（2003）、42-43。

〔付記〕 この研究の一部は、文部省科学研究費補助金（基盤研究B2）「盲ろう二重障害」インターネット教員研修システム構築に向けた調査・開発研究（代表：中澤恵江）により研究費の援助を受けた。